

## 今日のみことば

### □ 3月19日(日) コリント一 12章

聖霊によって「イエスは主です」と告白した者は、皆それぞれ聖霊の賜物を与えられる。その賜物に応じて、主に奉仕をするのです。

### □ 3月20日(月) コリント一 13章

聖霊の賜物を最もよく活用する道は、愛による。どんなに優れた賜物を与えられて奉仕しても、愛のない奉仕は、無益です。信仰は大切なものだが、愛によってのみ生きたものとなる。

### □ 3月21日(火) コリント一 14章

コリントの教会の礼拝は、自由な雰囲気、自由に語ることが出来た。しかしその際、守るべきことは、みな徳をたてるべきこと、適宜に、秩序を正しく行うことであった。

### □ 3月22日(水) コリント一 15章

パウロの福音の核心がここにある。キリストが聖書に書いてあるとおりに私たちの罪のために死んだこと、またよみがえったことである。キリストの十字架の死と復活です。

### □ 3月23日(木) コリント一 16章

パウロは主の日ごとに献金することを指導した。神のみわざのために定期的に献金をするのは、私たちの義務です。パウロはエペソの町では伝道の好機を与えられ、町にとどまった。

### □ 3月24日(金) コリント二 1章

神は試練の中にあつて、慰めを与えて下さった証しからパウロは語り始める。自らへの批判に対しても、神の「しかり」は「しかり」であつて、キリストの救いは変わることはない。

### □ 3月25日(土) コリント二 2章

パウロのコリント再訪問の変更は、彼の思いやりからのものであった。戒規は正しく守られるべきだが、それは交わりに復帰させることであつて、その人滅ぼすものではない。

---

ろ ぼ No. 1807  
2017年 3月19日  
日本バプテスト 立川キリスト教会  
牧師 大川 博之

---

歴代誌下 7:14

もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し彼らの大地をいやす。

私たちは、ペテロのメシヤ告白によって「この岩の上に教会を建てる」との言葉を聞きました。私たちは、神の祝福がどれほど豊かにこの教会に注がれているか、しっかりと確認させていただくことは、ほんとうに大事なことであろうと思っています。それは教会の土台がどのように築かれているかの大切なことですが、現実には私たちが目にするこの教会堂についても、神は私たちの思いをしっかりと心に留めておられることを私たちは忘れることがあってはいけないのです。

私たちは教会は建物ではないと言ってきました。イエスがペテロのメシヤ告白の上に建てると言われたように、またイエスが「二人または三人がわたしの名によって

集まるところには、わたしもその中にいるのである」と(マタイ18:20)と言われた言葉などを通して、教会とは建物ではないと言うことが浸透していますが、この教会堂も主の祝福なしにはその役目を果たすことはできません。神は教会の建物も大切な主の祝福のもとにあると言うことはしっかりと心に留めておくべきことです。

モーセが幕屋を建てました。神は「また彼らに、私のために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」(出エジプト25:8)と言われました。それは神がイスラエルの宗教共同体の生活の中心に立っておられると言うことをです。神は

約束されたように、幕屋を通してそのご臨在を示してきてくださいました、やがてダビデによって王国が建設され、神がご臨在の幕屋が天幕であることを心苦しく思ったダビデは、神殿建築を考えたが、神はそれはダビデのすべきことではなく、ソロモンにそれは託されました。

ソロモンはダビデが用意してくれたものと、神ご自身が立てられた計画に従って、壮麗な神殿を建築しました。そこは祭司を通して民が神を礼拝し、祈る場所でした。幕屋では神のご臨在を確認し、神からの言葉を聞いてきました。神殿は神が臨在され、民が礼拝をささげ、祈る場所でした。

ソロモンの神殿は実に壮麗でした。現代ではまだ完成にいたってはいませんが、バルセロナのサグラダ・ファミリアを思い出させていただいています。135年を経てもなお完成にいたれないほどの教会堂です。私たちには西欧の教会建築のすばらしさに圧倒されることです。確かに私たちの最善を尽くして、美しく、入りやすく、心地よく礼拝できる場所を作るのは、神の証しです。しかしそれと同時に、神が建物や、すばらしい飾り付けの中に収まられないお方であることは覚えておかなければなりません。

神殿が神にささげられ、ソロモンと民が礼拝すべき場所が準備されました。神はソロモンの奉献の祈りを聞き入れられました。その奉献の目的は、神殿を神礼拝の場所として聖別することでした。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————

ヨハネ4:46-54 病の癒やしを願ったのに

カペナウムでヘロデ王に仕える役人が、イエスに死にかかっている息子のいやしを求めて、ガリラヤのカナまでやって来てカペナウムに来てくれることを懇願した。イエスはその招きを退けられて、主はそこからその息子をいやされ、「帰って行きなさい。あなたの息子は直っている」と父親に言われたのです。その時、父親は主の言葉を信じました。。

カナからカペナウムまでは何キロも離れていました。たとえ主は病人が離れていても、主はおいやしになれるのです。主がゴルゴダの丘の上で死なれたのと、今日の私たちの間には、時間的な隔たりがあります。しかし主はそれを超えて、私たちを救って下さるのです。御霊がそれをなして下さるのです。時間と空間を支配しておられる主を、私たちはしっかりと信じるのです。この役人の信仰によって、彼と彼の家族のものみなイエスを信じました。信仰はそれを用いることで成長するのです。



Read God's Word.